

あ そう だ おお はし 麻 生 田 大 橋 遺 跡

調査の経過

東三河を貫流する豊川の右岸には、西から稲荷山貝塚・檜王遺跡・五貫森貝塚・大蚊里貝塚・麻生田遺跡・水神平遺跡と縄文時代晩期中葉から弥生時代初頭にかけての遺跡が帯状に分布している。麻生田大橋遺跡は、豊川中流域の低位段丘上（標高10m）に立地し、市道北側に位置する麻生田当貝津遺跡（縄文時代中期後葉から晩期後葉）と合わせて麻生田遺跡と総称されている。本遺跡は、豊川市教育委員会により、昭和52年度から11次にわたり、のべ4000㎡の発掘調査が実施され、縄文時代晩期の土器棺109基をはじめ、弥生時代中期後半期方形周溝墓、古代から中世・近世にかけての竪穴住居・溝状遺構・土坑・掘立柱建物・井戸等が検出されている。

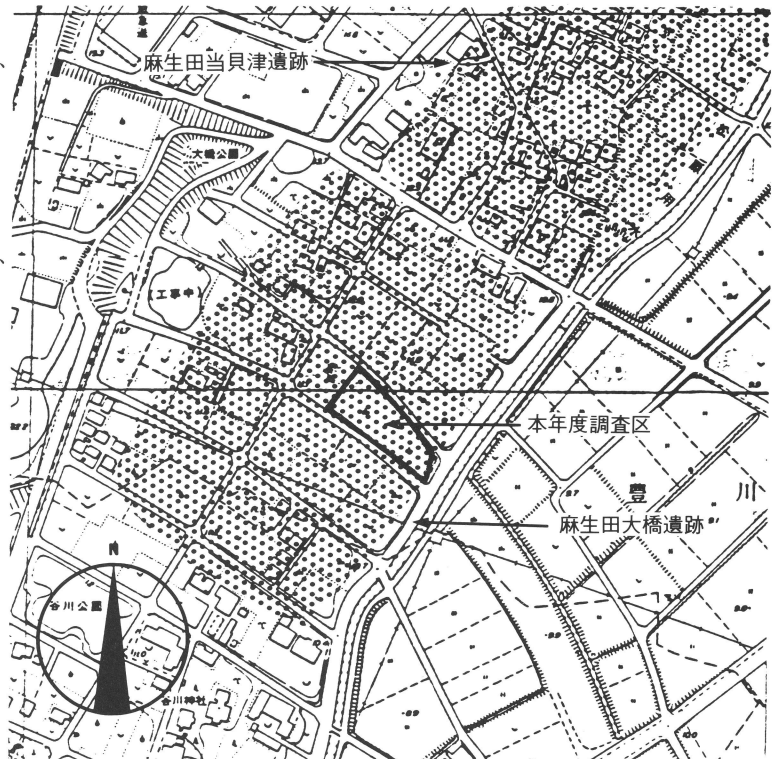
今回の調査は、県道東三河環状線工事に伴う事前調査として実施されたものである。

調査の概要

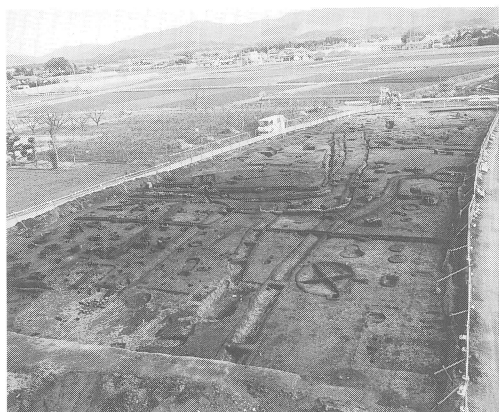
調査区の基本層序は、耕作土→黒色土（いわゆる黒ボクー遺物包含層）→黄褐色土である。調査区東側では黒色土が取り去られ、基盤である礫層が露出している。

今回の調査で検出された遺構・遺物は、縄文時代晩期後葉から弥生時代初期（Ⅰ期）、中世（Ⅱ期）、近世（Ⅲ期）の3時期に大別できる。以下、Ⅰ期の遺構、遺物を中心に、その概略を述べる。

Ⅰ期 土器棺61基、土坑5基（性格不明）が検出された。土器



第1図 調査区位置図 (1/5000)



全景（西から）



全景（東から）



第2図 遺構配置図 (1/600)

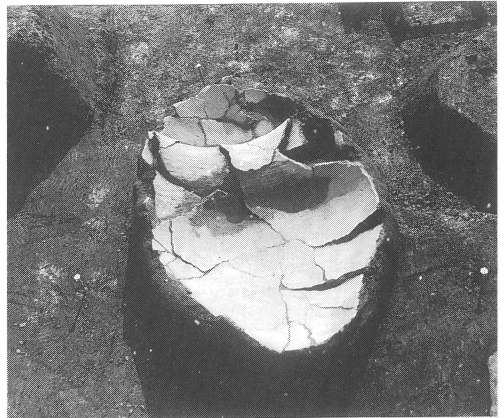
棺は地表下20～30cmの黒色土上面で検出されたものが多いため、耕作等による破壊がはげしく、原状をとどめるものは少ない。また、調査区の西半に集中して分布する傾向にある。土器棺に使用された土器は、突帯文系・条痕文系に属するもので、五貫森式（第3図1）、馬見塚式（2）、檜王式（5）、水神平式〔古いタイプのものと同様に口端に刻みを持ち羽状の条痕が器面全体に施される新しいタイプのもの（6）がある。〕の各時期にわたっている。埋葬状態は、横位のものが大部分で、斜位（5例）。立位（2例）のものが少例ずつ存在している。また、埋葬形態においては、単棺が基本となるが、甕の口を2つ合わせた合わせ口棺を含め、鉢や甕の底部などで蓋をしたものが全体の4分の1にあたる15例検出された。

縄文土器以外の遺物としては、石斧・石鏃・磨石・敲石・石皿・凹石・石棒・石剣等の石器類や、土偶（2点）、土製装飾品、玉類等が出土した。とくに、打製石斧・磨製石斧の出土量が多く、未製品を含め両方で500点を越える。しかし、近世の暗渠状の溝や包含層から出土したもので、確実にⅠ期の遺構に伴って検出されたものはない。

Ⅱ・Ⅲ期 溝状遺構19条・掘立柱建物（室町時代）・井戸（Ⅲ期）・土坑多数が検出された。遺物としては、灰釉陶器・灰釉系陶器・陶磁器・土師器（甕、鍋、皿等）などがある。土坑の中には、土師皿6枚と銅銭6枚が検出されたもの、大・中・小3種類の大きさの土師皿が百数十枚検出されたもの（Ⅱ期）、灰・骨片を含む焼土の中に、常滑窯産の甕・鉢、瀬戸窯産の盤、おろし皿、硯、土師質の皿、甕、羽釜、鍋等が検出されたもの（Ⅲ期・SK01）等がある。

まとめ

本遺跡は、五貫森式土器から水神平式・岩滑式土器に至る土器編年の上で貴重な資料を提供する。今後、合わせ口棺の検討による土器組成の問題、土器の器形、器種、調整技法の問題等を解明するなかで、東三河における縄文時代晩期後葉から弥生時代にかけての土器編年を体系づける必要がある。

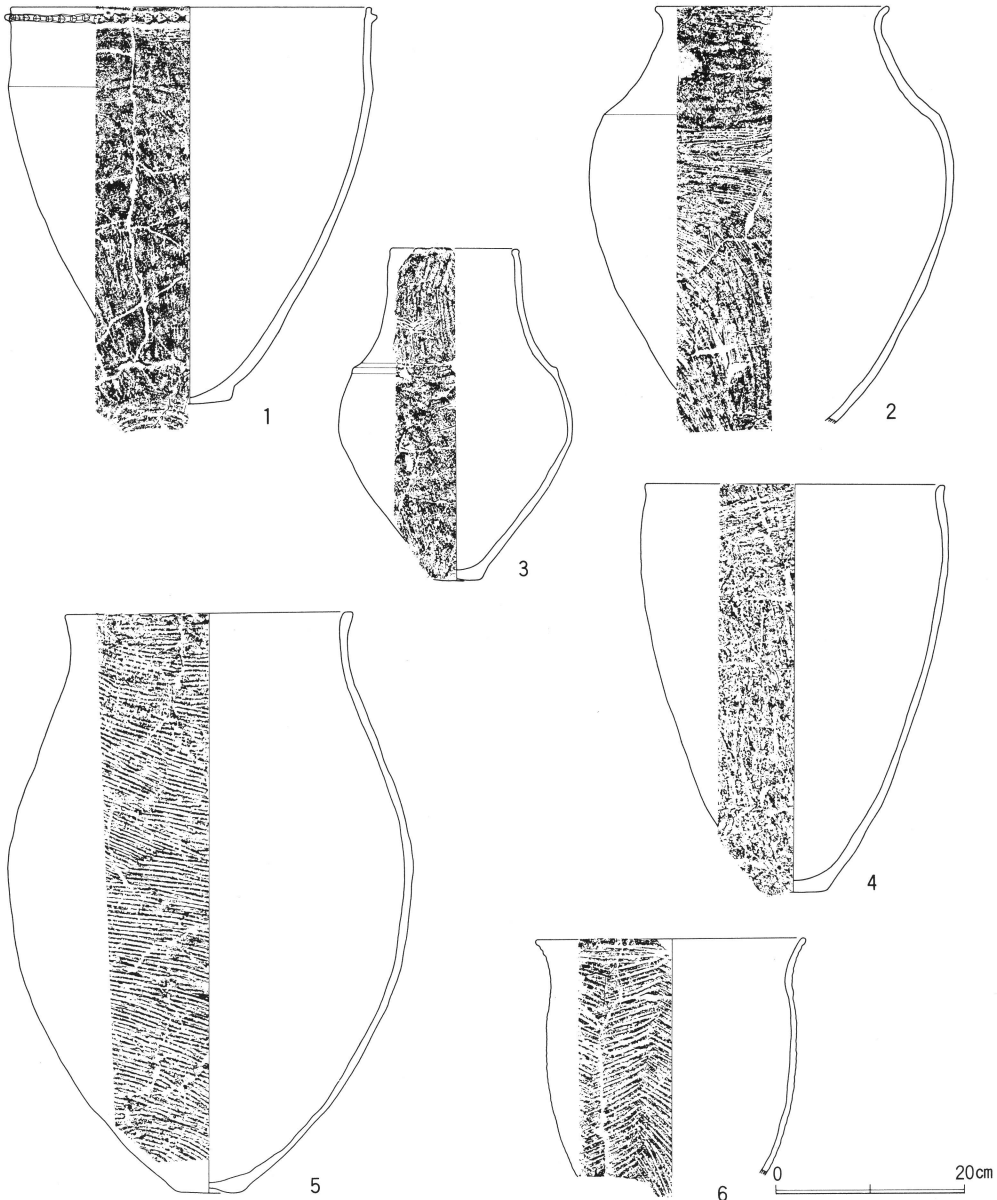


土器棺17 出土状態



SK01 遺物出土状態

さらに、本遺跡は、縄文時代晩期後葉から弥生時代中期後半期まで、土器棺、方形周溝墓を主体とする墓域として存在することが確実であるが、土棺器と同じ遺物包含層中から多量の打製、磨製石斧を検出する事実を考慮に入れると、単に墓域としてとらえるには、問題をのこしている。今後の調査で、竪穴住居等の生活跡の検出を期待するとともに、遺跡自体の性格の解明を再検討する必要がある。
(安井俊則)



第3図 縄文土器 (1/8)